

平成16年度「立ち上がる農山漁村」第2回有識者会議 議事録

林座長 それでは、官房長官、副長官がお見えになられましたので、始めたいと思います。

今日は、第2回の「立ち上がる農山漁村 有識者会議」になりますが、第1回で30の先駆的事例を選定いたしました。これまで、亀井前農水大臣始め有識者会議の委員の皆様からは幾つかの事例に実際に御視察いただいたり、アドバイスをいただいたりいたしました。

また、シンポジウムを行ったり、インターネットで情報発信を行ったりということで今日に至りましたが、今日の第2回では、是非これら30事例がどのような工夫、努力を成功に結び付けたのか、この要因分析、成功の秘訣といったものを調査、分析した結果について、委員の先生方に御報告いただきたいというふうに思います。

また、要因分析の後、それではこれをどういうふうに活用、普及させていくかということについても論議いただけたらというふうに思います。

それでは、「立ち上がる農山漁村」活動報告について、農村振興局長の方から御説明いただきます。

農村振興局長 農村振興局長の川村でございます。それでは、私の方から簡単に、これまでの取り組み、お手元の資料1に時系列的に書いてございますのでごらんいただきたいと思います。

今の林座長のお話にもありましたとおり、第1回は昨年6月でございました。そこで30事例、優良事例を選んでいただきまして、その後、私どもの福本政務官とか亀井大臣に現地を視察していただいております。

また、8月にはこの有識者会議の委員の皆様、北海道の小清水町と中札内村、これはアン・マクドナルド委員、林座長、長岡委員、今村委員といったことで、4名の方が出かけられます。

9月に入りまして、富山県の立山町。ここは、小泉武夫さんと白石委員が行かれています。

9月11日には、「立ち上がる農山漁村」のシンポジウムを東京大学の弥生講堂で開催していただいております。ここには委員の方6名、アン・マクドナルド委員、今村委員、小泉委員、白石委員、三國委員、林座長ということで参加をいただいております。ここでは、30事例のうちの食彩工房たてやま、明宝レディース、君田21、内子フレッシュパークの4事例の方が発表をされております。

10月には、委員でございます永島委員が「青空市場」を主催されておりますけれども、そこで、この「立ち上がる農山漁村」のPRもさせていただきました。

11月に、更に現地視察を三國委員に岐阜県と愛知県の方に行っていただいております。ここにはそばの里まぎのとか、明宝レディースに参加をいただいております。

次のページでございます。

今年に入りまして、1月でございますけれども、「農業・農山漁村の明日を語る会」。これは、この「立ち上がる農山漁村」と、猪瀬直樹さんが紹介されました幾つかの取組事例とジョイントいたしまして、こういった会合を開かせていただいております。これには30事例のうち、黒松内、愛東町、益田市、内子町の4つの事例から参加をいただいております、この会には林座長においでいただいて、いろいろ御説明、意見交換をしていただいたところでございます。

更に、2月には永島委員が鹿児島県串良町の方へ現地視察をしていただいております。

また、3月に、同じく「青空市場」で、この30事例の北海道の川西農協、明宝レディース、京都の美山町が参加をして、やっていただいております。

そして、本日の第2回有識者会議を迎えた。これが経緯でございます。いろんな取り組みをしていただきまして、本当にありがたいと思っております。

林座長 ありがとうございます。

それでは、続きまして選定証の交付について、同じく局長から御説明いただきます。

農村振興局長 わかりました。

30事例を選んでいただきましたが、選ばれた方々から何か目に見えるものといえますか、飾っておけるようなものを是非いただきたいというお話がございました。それで検討いたしまして、資料2にこの文言を選ばせていただいておりますけれども、そういう文言で、しかもこういう盾の形で飾っておけるように認定証として交付をしたいというふうに思っておりますので、よろしく願いをしたいと思っております。

以上でございます。

林座長 これは、本当は小泉総理のお名前をいただくが一番なんです、たくさん乱発しますと価値が落ちるということで。

農村振興局長 この中で、これは食料・農業・農村政策推進本部の下での有識者会議でございますが、その推進本部長が小泉総理でございますので、そこはしっかり書かせていただいております。

林座長 真ん中にきちんと書いてありますね。

よろしいでしょうか。

丹羽委員 今の資料1の2ページ目、小泉さんの資料は直しておいた方がいいと思うんですけれども、「平成17年1月」ですね。これは直しておかないと。ほとんど気がつかれないと思っておりますけれども。

林座長 それでは、今、見ていただいておりますので、続きまして平成17年度の進め方について、同じく。

農村振興局長 これは1枚紙を用意させていただいております。資料3でございます。

大まかな活動のイメージとして書かせていただいておりますが、まず16年度は30を選んでいただきまして、今度、また17年度も、更に優良な事例を選んでいきたいと思っております。

ます。

それについて、最初は初回で時間的な制約もありまして推薦形式を取りましたけれども、今回は、できれば公募の形でできないかということを考えております。そういったのを待ちまして、第1回の有識者会合を第2・四半期に開けないかということでございます。

そして、またそういった優良事例のところを御視察いただいて、それを踏まえた上で第2回の有識者会議を開催して、そこで選定証の授与等も何かの機会をつくれないうことと考えてございます。

それから、また年度の締めということで、来年になりまして2月か3月に、有識者会議で次の活動方針等を御議論いただくといった、その間はシンポジウムとか、あるいは現地視察ということを精力的に取り組んでいただきたいというふうに思っているところでございます。

以上でございます。

林座長 ありがとうございます。

来年度は、公募という形。これは、本当は今年度も取りたかったんですが、少し時間がよけいかかるものですから、何しろ始めることが大切だということで、今年度は公募でない形でスタートしましたが、来年度は公募という形でやりたいという御説明でした。

それで、どのような公募の方法を行うかということも含めて意見交換を行いたいと思いますので、どうか御意見がございましたらいただきたいと思います。いかがでしょうか。

これは、インターネットで応募するんですか。

農村振興局長 そうです。私ども、ホームページを開設しておりますし、幾つか広報媒体と申しますか、広報紙も持っておりますので、そういうところにも載せるし、また、協力していただけるメディアにもお願いをするということを考えております。

三國委員 最初、何か基準をつくった方がいいのではないですか。ランダムというよりも、例えば売り上げが幾ら以上あるとか、何か基準がないと結構ランダムになってしまうので、標準みたいな。

林座長 あるいは、これはちょっと難しいかもしれませんが、ある地域から1件しか受けつけないとか。

三國委員 選抜をして、代表でという方が。

林座長 地区選抜みたいなのでやってきてくれないとか、そういうことですね。

三國委員 はい。

農村振興局長 わかりました。それは、ちょっと検討させていただきまして、また電話等で皆様にも御連絡をした上で進めたいと思います。

林座長 ほかにはございますか。

マクドナルド委員 余り狭くなると、選ぶ側のすごい固定概念が、その固定概念をつぶそうとしている委員会ですから、ユニーク性とか変わりものとかという、ごめんなさい、生意気で恐縮なんですけれども。

林座長 確かに、そうですね。その地域でいいのがつぶされてしまったら困りますから、余り地区選抜なんてやらない方がいいかもしれませんね。

マクドナルド委員 ほどほどでいいかもしれないです。

林座長 よろしいですか。

農村振興局長 そこはよく踏まえまして、絞って殺してしまわないようにできるだけ、ただ、余り数が多くても精度の高いチェックができませんので、その辺り兼ね合いをよく考えたいと思います。

丹羽委員 そんなにたくさん来ますか。

農村振興局長 結構、なぜおれのところが選ばれなかったんだというクレームもありましたので、割とあるのではないかと思います。結構、PRにも使えて効果を感じているところもあるようですので、メリットがあると。

丹羽委員 数が多くなればインターネットで応募してもらって、それでふるい分けして、今度は書類で出していただくというのがいいかもしれませんね。

永島委員 私「青空市場」を開催しても、インターネットでホームページとかやっていないところがあるんです。それですごく頑張っていて、それは結構、この間鹿児島や何かといったところも頑張っているけれども、最新のツールはなかなか使えない。そういう意味では、広報をするのに、例えば本当に地元紙や何かに本当にくまなく載るような形で広報してあげてほしいとはちょっと思います。

林座長 そうですね。インターネットだけではなくて。

農村振興局長 先ほど申し上げましたように、いろいろな広告、メディア媒体もありますし、県の広報とかそういうのもお願いをして載せていただけたところは載せていただくということも考えたいと思います。

林座長 ありがとうございます。それでは、ただいまの御意見を生かしていただきたいというふうに思います。

引き続きまして、成功要因分析の御説明をいただきたいと思いますが、これは私たち、この後、論議をさせていただくわけですが、まず事務局の方から概要を御説明いただいて、質疑応答を行います。

ただ、間もなく総理が12時5分ぐらいには御到着になられるというふうにお聞きしていますので、その際は中断する場合がありますが、そこまで論議を進めたいと思います。

それでは、お願いします。

農村振興局長 わかりました。

お手元の資料で、資料5という分厚い資料がございます。これが詳しいものでございますが、時間の関係もございまして、ダイジェスト版といいますか、資料4を用意してございますので、これで駆け足で御説明をさせていただきたいと思います。それでは、資料4をごらんいただきたいと思います。

1ページでございますけれども、まず最初の上段の方は、「立ち上がる農山漁村」がど

という観点で選ばれたかということでございますが、これはおさらいでございます。

それなりの情熱、経営感覚。下に行きまして、革新的な戦略。右へ行きまして、地域資源を最大活用する。あるいは、経済の活性化なり雇用の創造に貢献するという視点でまず選ばせていただいていると。

それから、切り口と申しますか、下に書いています5つの分野がございました。「食」「IT」「輸出」「交流」「バイオ」でございます。

そういった、選ばれました30の事例を調査、アンケート等によりまして定量的な、活動期間とか収益、事業規模等も調べさせていただきまして、それから、現地調査ということで、現地関係者からの聞き取りもさせていただいたわけでございます。

下に、大きく4つの柱を立ててございますが、左から行きまして「ニーズの把握」。それから、下の方へ行きまして「経営感覚」「オリジナル性」「コミュニティの活動」。これは、それぞれ柱を立てましたけれども、オーバーラップする部分もございまして、必ずしもきれいに切れるわけではございませんが、この4つの観点が非常に大事なかなということを感じました。

次の2ページをごらんいただきたいと思えます。

まず「ニーズの把握」という観点では、例えば、左に事例で書いてございますが、東京都の八丈町。ここは、地元の若者の栽培農家がオランダの花市場を見学しまして、そこでフェニックス・ロベレニーが非常に高価で売れているということを発見いたしまして、これなら売れるのではないかとということで、そういう市場をしっかりと把握して売り込みを行ったといったような事例もございます。

また、直販所等におきましては消費者とのコミュニケーションということで、直にそのニーズを把握する、あるいはそれを生産面へフィードバックするということがきめ細かに行われたといったところが非常に成功に結び付いているということが見て取れたわけでございます。

2点目の「経営感覚」でございますが、これも2つ事例を左に書いてございますけれども、1つは山形県の金山町でございます。ここはそばを売りにしたいということですが、普通のものではだめだということで、専門家を呼んで、品質なり保存法、そういうものにこだわってやった、それが成功に結び付いたということでございます。

また、南伊豆の妻良地区でございます。ここは、観光に何とか結び付けようというはっきりした目的意識を持って地域資源を活用されたといった意味で、そういう専門家の活用とか目的意識を持った行動といったようなことが経営感覚としてすぐれているのではないかとということでございます。

次のページでございます。

「オリジナル性」ということで、ほかの事例、また各委員も現地を視察していただいておりますのでいろいろ御意見あると思えますが、1つは福島県の西会津町で土づくりを徹底してやられるということで、それが非常にミネラル分が豊富で味もおいしいということ

で、この栽培方法を商品の売りということを取り組まれて、地域としては非常に大きな売上げを上げられておられるといったようなことで、右に書いてございますとおり、いろんな取り組みがありますが、商品の差別化とか、あるいはデザイン面も含めて工夫をされているといったようなものが1つの成功要因になっているというふうに感じ取れたわけでございます。

また、もう一つの柱の「コミュニティの活動」でございますけれども、これも2つほど事例を掲げさせていただいております。

1つは広島県三次市でございます。これはできるだけコミュニティの活動を地域ぐるみでやった方がやはり長続きといたしますか、地域の盛り上がりも非常によくなるということでございますけれども、住民から出資を募って第3セクターをつくるということで、皆さん当事者意識といたしますか、そういう参加意識を高めるということで行っている事例があります。

それから、いろんなそういったコミュニティぐるみでの活躍の場、「舞台」をつくるという意味で農家レストランを核にして、地産地消等に取り組んでおられるといったようなことがございまして、今挙げました4つの柱の観点から見ますと、非常にそれぞれが工夫を凝らしておられるということがわかったわけでございます。

こういったところをそれぞれ、まさに自分たちの頭を使って工夫されておるといところが非常に大事ななということを感じた次第でございます。

簡単でございますが、以上でございます。

林座長 ここに4つ、今、主な要因を挙げておられます。ニーズの把握と、経営感覚、オリジナリティー、それから、コミュニティの活動ということですが、委員の先生方は、この中身でも結構ですが、それ以外にもし、今、この瞬間に思いつかれても結構ですので、御意見いただければと思います。

大体、こんなところでしょうか。

永島委員 例えば、これからだと思わんですけれども、経営感覚や何かのときに、女性の力というのが、今、すごく変わってきていると思わんです。

今までは3ちゃん農業で、おじいちゃん、おばあちゃん、お母ちゃんの農業だったのが、今がすごく女性の経営感覚がすぐれて、各地で直売場とか加工場を使って、30事例の中にも明宝レディースや何かが出ていますけれども、これからは女性の経営感覚と農業に対する思いというのがすごく大きくなっていくのではないかと、各地に行って感じる事なんです。

丹羽委員 それと、高齢者ですね。

林座長 高齢者の力。

丹羽委員 はい。私の事例の中にも、平均年齢67歳の第3セクターが非常に成功しているのがあります。そういう女性の目覚めと、高齢者の活用というのが、これからますます少子高齢化で重要になるんでしょうね。

林座長 そのときに、若い人というのは高齢者とうまく。

丹羽委員 若い人は都会に行ってしまうんです。

林座長 この成功事例の中で、若い人がやっているのがありましたね。

マクドナルド委員 多分、北海道の方の中札内村の方は、やはり女性たちが事業へ魅力を感じて、北海道に本土からというか、内地から飛んで行ったりとか、いろんなところから来ているんですけれども。

丹羽委員 畜産業なんかも、本当に若い人でないとできないですね。

マクドナルド委員 力仕事ですから。

あと、やはり岐阜の方でレディースケチャップをつくっているところも、この間、実はちょっと行ってきたんですけれども、トップは年配の方ですけれども、若い女性、30代の女性たちもいたりしていて、経営が成り立っていれば、若者が今度IターンとかJターンしてくれるかもしれません。

永島委員 この事例には挙げられていないんですけれども、奄美大島に行ったときに、奄美大島はIターンとUターン率がすごい高いんです。例えば、瀬戸内町にこの間、パッションフルーツをつくるという埼玉県の20歳の女の子が就農するというんです。それで支援するのは瀬戸内町の行政で、あとは地元の農家の方が助ける。

お話を聞くと、やはり人なんです。奄美大島の人たちがすごく受け入れてくれるということなんです。例えば、サラリーマンをやっている人がやはり瀬戸内町に移住して、サーフィンをやりながら来て、漁師になったという方もいらっしゃるのです。

内閣官房副長官（政務・参） 済みません、遅くなりました。

内閣官房長官 まだちょっと予算委員会が長引いているようで。

内閣官房副長官（政務・参） 今、終わりました。今、おいでになるところでございます。

林座長 長官、今、お話をお聞きになってみて、いかがでしょうか。

内閣官房長官 私、島根県が選挙区で、いわゆる知的財産権と言うと大げさだけれども、それについてどう考えたらいいかというのは、県の悩みでもあるんです。

それは、ここに島根県はいわみのコシヒカリというのがあるんですけれども、これはコシヒカリとしてはみんな同じだから、これはしようがないんですが、例えば、最近は隠岐島の方で、イワガキの養殖に成功して、それで一生懸命、ちゃんと増やすのがなかなか難しいんです。しかし、相当成功している。

それから、かつては和牛で一等賞を取った糸桜号というのが出たんですけれども、その後のいろいろ管理がうまくいかずににせものが出て瓦解してしまうんです。島根和牛というせっかくいいものが出たのに、瓦解した。

それから、ある町では、いわゆる菌床栽培です。シイタケもナメコもみんな菌床栽培でやって、極めて優良なものできて、一時爆発的に売れた。しかし、それをやると、大体みんな、ほかまねするんです。特許権というのがないから、もっとちゃんとした方がい

いと思うんですけれども、そうすると隣もやっている。

隣ぐらいならいいんですけれども、実はいろんな経路で中国に教えてしまうんです。だから、菌床栽培のシイタケなんか、日本発だけけれども、今やみんな中国発になってしまって、そういう技術が流出するわけです。そうすると、せっかく知恵を出したんだから、創業者利潤のようなものがないと皆さんもがっかりしてしまうし、なかなか続かない面もあるんです。だから、一つひとつ考えたらどうかと。

特に、血統みたいなものを大事にするところは、和牛なんかはちゃんとDNAで保持して、この系桜号、最近どんどん発達してきたけれども、これは間違いのないというようなお墨つきがあって売れるとか、そういうことが大事だなと。

今は、島根県のイワガキでどんどん広がりますから、我々は警戒をしているんですけれども、なかなか栽培が難しいものですから、しかし、大変なことを、それこそIターンの人が隠岐島の1つの島の漁業組合長になって、イワガキの養殖をやっているんです。これはなかなか増やすことが難しいものですから。

林座長 そういう方を、やはりその地域が受け入れるんですね。Iターンした人を。

内閣官房長官 漁業組合長になってしまったんです。さすが、偉いというので。

大体、離島で、それこそ65歳以上の人ばかりの島ですから、それでも元気が出てということですが、だから、元気が出ているからいいと言っているだけでいいかということが問題でして、いろいろ。

丹羽委員 やはり消費が拡大するようなことにならないと、だめですね。

トレーサビリティということで、日立さんがやっているミューチップというチップがあるではないですか。あれでタグをして生産履歴を書けば、この安心・安全という面でさっきのカキも相当特色が出るのではないですか。そういうのをお使いになればいいし、うちは岐阜県と和牛の精子の遺伝子情報をチップに入れまして、それで生産履歴をそのままDNA管理するんです。京都大学と共同でやっているんです。だから、これは多分、神戸牛とかいろんな牛に使えます。

林座長 今、ものすごくチップが小さくて安くなりましたし。

丹羽委員 ほこりみたいなチップです。世界最小のチップです。

林座長 そのリーダー、読取器も非常に共通性が出てきていますし。

内閣官房長官 だから、牛なんかは特にそういう点、我々はその前の時代でしたから、歯がみをして、にせものが出るんです。

林座長 この4つの中にオリジナリティがありますけれども、最初に頑張った方がすぐ追い付かれてしまって、その方の成果が余り実らないというのはちょっと残念ですね。

内閣官房長官 だから、特許権みたいなものも取れるようにしたらいいと思うんです。

丹羽委員 なかなかそういうカキの養殖なんかは、特許は取りにくいですね。

内閣官房長官 だから、そういうことがありまして、微妙な温度変化と何かでちゃんと違いができるんです。要するに、受精するわけですから、その受精のされ方が技術な

んです。

丹羽委員 技術の特許化するというのは、非常に難しい。そういう仕様の仕方の特許というのは非常に難しいですね。

林座長 新しいものを何か発見とか、そういうのだといいんですけども。

丹羽委員 だから、チップでオリジナリティーを出す、ブランドをつくるというのはいかもかもしれません。

林座長 大臣がお着きになられましたけれども、今、私たちは30選ばせていただいた「立ち上がる農山漁村」の成功は何だったのかという要因分析をしておりますけれども、この中でオリジナリティーがやはり非常にある。

だけれども、細田官房長官が御自身の島根県の事例で、いいものをつくってもすぐ皆がまねしてだめになってしまうというお話、いろんなことをおっしゃっているんですが、確かにそのとおりで、今、新しいテクノロジーとしてはマイクロチップとかいろんなところで、トレーサビリティと、それから、にせものを横行させないという、今、牛でやっておりますけれども、ほぼすべての食品でそういうのをやっていくような体制というのはどうなんだろうかという論議を今しております。

農林水産大臣 大事なことです。

林座長 あと、それ以外に3つの要因があるのではないかと。ニーズをうまく把握している地域、あるいはこれまで以上に新しい経営感覚を持っているところ、あるいはコミュニティの活動が非常に活発なところという。

丹羽委員 余り売れ過ぎても困りますね。島根県のお米の話は、余り売れ過ぎると困るんだと。この程度がちょうどいいんだというお話をされていました。

農林水産大臣 どうもアジア全体になれば、特許に対する認識というんでしょうか、そういうものを守る基本的な知識というのが遅れていたように思います。最近ですね。こういうふうに。

丹羽委員 中国はまだまだですから。

農林水産大臣 おっしゃるとおりです。アジア全体に言えることではないでしょうか。

丹羽委員 ブラックボックスをつくって、技術的にはそれは出さないという、アメリカの防衛産業みたいにそういうことをやらないと、それはすぐコピーが出ます。

内閣官房長官 大量に爆発的に売れるときに、みんな日本企業がやるんです。インドネシアでも、田んぼに塩水入れてエビ飼わせたわけでしょう。田んぼはだめになるし、エビは安くなるし、ただ消費はでかいものだから、それでもいいではないかと。外国でつくれという話にして。

(内閣総理大臣入室)

林座長 総理がお着きになられました。

実は、1月13日、総理が是非委員の皆様とお会いしたいとおっしゃっていただいて、その約束を2か月で守っていただいて、大変立派な総理だと。ますます好きになりました。

男に好きになられても余り喜ばれないかもしれませんが、今日、総理が会いたいとおっしゃっていた委員の方が来ておられますので、左の方から自己紹介していただきますけれども、三國委員から。

内閣総理大臣 召し上がりながら、どうぞ。

これは何ですか。

林座長 これは、後からマクドナルド委員から御説明があると思いますけれども。

内閣総理大臣 これは牛乳じゃないんですか。

林座長 無殺菌牛乳です。

マクドナルド委員 想いやり牛乳です。

内閣総理大臣 召し上がりながら、どうぞ。

林座長 それでは、三國委員から。

三國委員 四谷でフランス料理をやっている三國です。よろしくお願ひします。

内閣総理大臣 随分、簡単な紹介ですね。もう少しぐらい。

永島委員 役者の永島です。農業に関心を持って、最近は少し芝居ができる農家とされています。

マクドナルド委員 カナダ出身のアン・マクドナルドです。

内閣総理大臣 マクドナルド、有名ですね。

マクドナルド委員 名前だけです。

日本の農村漁村のフィールドワークをやっていて、ベースは宮城県になっているんですけども、ここ 15 年間ぐらい全国あちこちを歩いています。よろしくお願ひいたします。

丹羽委員 伊藤忠商事の丹羽でございます。

林座長 それだけですか。

丹羽委員 余り紹介を言うのも。

林座長 それでは、今村委員。

今村委員 横須賀市長井町出身の今村です。横須賀高校出身です。

内閣総理大臣 長井に住んでいるんですか。

今村委員 そうです。

内閣総理大臣 今でも。

今村委員 今は大和の方に来ています。それで、ふるさと創生を『ザ！鉄腕！DASH H！！』で「DASH村」というものを展開しております。

林座長 それは大変な、私たちにとって若い人、農村で若い役者に農業活動をやらせるというすばらしい番組なんです。

それでは、済みません、総理から。

(報道関係者入室)

林座長 この後、カメラが入って、ごあいさついただいて、どんどん食べていただいていいんですね。

内閣総理大臣 いいんですよ。カメラが入っているうちは食べにくいから、カメラが出てから。

林座長 それでは、小泉総理からごあいさつを賜ります。

内閣総理大臣 今日は、ようこそ官邸にお越しくございました。

私は農業というのは、これから大変発展の可能性のある産業ではないかと思っております。食の安全、これはBSEだけでなく、一番大事なことであります。

健康をつくるにしましても、食事がいかに大切かということで、私は、知育・体育・徳育というのはだれでも知っていますけれども、食育という、これは生活の基本、人間の基本だと。食生活を大事にすることから、人間生活は、健康にしても文化にしてもすべての基本であると。

その基本をもっと大事にしようということを申し上げておりますが、最近の農業の衰退を憂える声ばかりでありますけれども、新たに意欲を持って農業に取り組もうという人もたくさん出ております。農村、山村、漁村、言わば日本の食生活の基本である、また文化の基本である。こういうことから、悲観的な議論ばかりでなくて、明るく未来に立ち向かっていこうという農業の在り方も考えていいのではないかとということで、林先生始め多くの皆さん方のいろんな知恵を出していただきたいと。

それで、農業は未来産業である、新しい可能性を秘めた産業であるということで、多くの方々に関心を持っていただきまして、今後、日本全体が安全な食生活を享受できて、引き続き健康で長生きできる社会をつくっていききたいという観点から、今後とも、この「立ち上がる農山漁村」、皆さん方の御意見を参考にしながら日本づくりに励んでいきたいと思っておりますので、どうかよろしく願いいたしたいと思っております。

今日はありがとうございました。

(報道関係者退室)

内閣官房長官 これが、さっき紹介があったんですが、認定証です。これが出るそうです。総理の名前が、こっちの中に張っているんです。

林座長 そうしていただきたいものなんですけれども、なかなかそうしますと多く出過ぎるということで、少し。

それから、今日のこの献立の、これは官邸で料理していただきましたけれども、素材は選定された30の「立ち上がる農山漁村」から来たものがほとんどです。

内閣官房長官 それでは、このお米は島根県ですか。

林座長 そうです。

それから、ダチョウは神奈川県といったことで、ここに産地が書いてございます。

内閣総理大臣 これは台湾に輸出しているんでしょう。

林座長 そうなんです。

内閣総理大臣 コシヒカリというのは、普通新潟の方が有名なんですけれども、なぜか島根県のコシヒカリが台湾では有名になってしまうんです。

丹羽委員 これは、堆肥を使っているんです。

内閣総理大臣 輸出して。

丹羽委員 堆肥を使ってお米をつくって輸出しているところが、やはりほかのコシヒカリとちょっと違うんです。

農林水産大臣 それから、コシヒカリは福井県が発祥です。

マクドナルド委員 福井県に行くと、みんな悔しがっています。自分たちがパイオニアだったのに、どうして新潟が得するのかという。

内閣官房長官 ここに福井県の方がいらっしゃいますから。

マクドナルド委員 ですから、私、その話を聞いたときに、やはり日本は、パイオニアは損する、2番目が一番得する国という。ちょっと悪い冗談で失礼しました。

内閣総理大臣 パイオニアは開発したことで満足してしまって、後の努力が足りないのではないですか。

マクドナルド委員 そうかもしれないですね。

林座長 それと、すぐまねされてしまうというところがつらいなという。

さっきからの話で、これはなぜ、この30の農山漁村が成功したのかという要因分析の中でオリジナリティーがあるんですが、このオリジナリティーは、細田官房長官のところではいいものをつくってもすぐまねするので、次がまずいという、アンさんが言われるように。

内閣官房長官 やはり農業所有権というような、知的財産権も必要なんです。勿論、特許が取れる食べ物はいっぱいあるんですけども。

マクドナルド委員 実は、この間東京でシンポジウムがあって、これから紹介があると思うんですけども、この寒もちそういう風船のあれで、電子レンジや何かでひょこっとなるんですけども、女性たちのグループが開発したんですけども、それでは特許権、パテントを取りましたかと聞いたら、いや、それは何ですかと思いつかないんです。自分がつくっているものに権利はある、取るべきです。

林座長 アンさん、それではついでに、無殺菌牛乳と寒もちを御紹介いただけますか。

丹羽委員 アメリカの種屋さんというのは、1回つくりますとハイブリッドとって、この種屋さんから種を買わないと絶対に自分でできないんです。それでもうけるんです。だから、お米もコシヒカリも1代限りの種をつくって、全部自分から買わないと農産物ができないと。そういうふうにしなないともうからないんです。

アメリカの種屋さんというのは、それをやっているんです。それで膨大な研究費をつぎ込んで種をつくって、全部その種屋さんから買わなければいけない。1代限りですから、自分でかけ合わせてできないんです。そういうことが、これから出てくると思います。

そうすると、今、細田さんがおっしゃるように、特許どころか、その種を使わないとできないわけですから。

内閣官房長官 今、おっしゃったのはいわゆるF1なんですけど、ほとんど種のたぐいは

そうになっているんです。F2、F3となると、やはりできが悪いんです。だから、あらゆる農産物、JA全農の協力でかなりそうになっているんです。今、種を自分でつくる時代ではなくなっているんです。

更に、突っ込んでいくと、やはりシイタケを菌床栽培とあって、こういう茶碗みたいなところにはめて、おがくずでシイタケ、ナメコをつくるという技術をせっかく開発しても、それ自体の技術は特許を取れると思うんですけれども、そんなものを取った人がいなくて、それで中国に取られてしまうとか、だから、いろんなことがちょっと微妙なんです。

さっき言われた種も、コシヒカリの種のあれを持っている人がやはり、うまいものはかなり独占的にあれしている面もあるようです。

内閣総理大臣 今、コシヒカリとか何ヒカリとか、昔はそんなこと気にしませんでしたね。私はお米はお米だったんですけれども、どうしてこんなに品種がいろいろ出てきてしまったんでしょう。

林座長 やはり、おいしいものが欲しいとなりますと、どうしてもおいしい品種をつくらうという。

内閣総理大臣 日本では、日本米か外米だけでしょう。今、それがすごい詳しくなってきましたね。

今村委員 ブランドを、それぞれの地域で。

丹羽委員 やはりおいしいんでしょうね。それから、気候の変化に非常に強くなった。北海道でもできるとか、いろんな耐性ができましたね。

農林水産大臣 同じ種でも、同じ新潟でも、同じものができわけではないので、例えば湯沢の山を1つ越えてしまうと、どんと味が落ちこちてしまいます。

永島委員 魚沼産でも、同じ地域の谷津とあって、お水があって日が当たる場所だけでも違う味になるそうなので、そういう意味では、本当に日本の気候と風土というものがお米に対してすごく合っているし、あと、技術というものがすごく発達していると思うんです。

内閣総理大臣 これは何ですか。

マクドナルド委員 これは寒もち紙風船です。富山県立山でつくっているんですけれども、本当はビーチボールで投げたりできるんです。

内閣総理大臣 温かいですね。

マクドナルド委員 これは、もともともこういう形で作って、それで電子レンジに入れて、ちょっと時間かけて、それでふくらんででき上がりという、ある意味でポップコーンみたいなものです。

あとは、これはどちらかというと、この牛乳、いかがでしたか。

内閣総理大臣 おいしかったです。

マクドナルド委員 実は、この2つの商品は、女性のアイデアを中心にしてつくられてきたんです。

これは、北海道の中札内村というところで作られているんですけども、社長は男の人ですけども、やはり女性のアイデアを取り上げて、牛を飼って、それで、私から見れば面白いと思っているのが、無殺菌牛乳です。ジス・イズ・オリジナル。こくしかないんです。

内閣総理大臣 無殺菌というのは、どういうことですか。

マクドナルド委員 殺菌しない牛乳です。

内閣総理大臣 お乳からそのままですか。

林座長 そうです。

内閣総理大臣 昔はそうでしょう。

マクドナルド委員 ですから、考えてみれば、これは昔みんなが飲んでいた牛乳です。

林座長 器具を非常に丁寧に女性が洗いますから、殺菌しなくていいという原理なんです。

丹羽委員 何も混ぜていないんですか。

マクドナルド委員 いないです。

内閣総理大臣 普通の牛乳は、温度で殺菌しているんですか。

林座長 はい。2種類ありまして、低温殺菌と高温殺菌があるんですが、高温は100度ちょっと超えたところで、本当に数秒間。これがほとんどです。

丹羽委員 それは、菌は大丈夫ですか。

林座長 ほとんど大腸菌ですけども、これは無殺菌でも菌がないから殺菌しなくてもいいという、これはちゃんと検査を通過しているんです。

内閣総理大臣 どうして、これは殺菌しないで、ほかのは殺菌するんですか。

農村振興局長 これは牛を元気にして病気にさせない。これが1つです。

それから、徹底して管理をするということで、本来は体内を通りますので菌はいないんですけども、搾乳のときとかそういうときに菌が混ざるので、普通の牛乳は殺菌をしないといけないということです。

マクドナルド委員 普通の牛舎とちょっと違います。普通は牛舎は目に入る前ににおいがばあっと漂ってくるんですけども、ここはわらを使わないで、砂、サンドベッドに寝かせているんです。それで、1日2回大掃除して、ですから、においはないし、とてもクリーンな状態で牛を飼っているんです。

内閣総理大臣 やっているのは北海道だけですね。

マクドナルド委員 こちらは、この工場だけです。

林座長の方が一番詳しいんですけども、やはりスウェーデンとか、そういうアニマルウェルフェアをすごく西ヨーロッパの方が先駆けてかなり力を入れてやってはいるんですけども、日本はこれからということで、その意味ではこういう商品だけではなくて、牛を飼っている状態というところでもすごく評価すべきところでもあると思います。

どこまで動物愛護主義者になれるかというのは別にして、やはり商品にするに当たって

大事にしていくというか、その動物の健康状態に配慮すれば、そこから出る商品もすごくすぐれたいいものになっていくという発想は、やはり現場でやっていって、ですから、あらゆるところでそういういろんな発想を、また、技術者たちは無殺菌の牛乳は絶対無理なものを、インポッシブルをポッシブルにしたというのが、農業だけではなくて一次産業はやはりそういう発想が今すごく問われているところで、その意味ではすごく面白いですね。

林座長 やはり牛の世話は、力仕事ですけれども、お年寄りよりも若い女性。

総理、こちらのおもちは、今度は高齢の女性が考えたんですけれども、もともとこれは富山県で、富山の薬売り、売薬でよく地方に、私たち子どものころに風船とかああいうのをもらいましたね。そのアイデアを、この寒もちに応用したようなんです。

内閣総理大臣 これは、富山県なんですか。

林座長 富山です。

内閣総理大臣 富山の越中ですか。

林座長 越中富山の薬の。

内閣総理大臣 置き薬。

林座長 それを、今、向こうのぺっちゃんこの中におもちが入っているんですけれども、電子レンジでちんとやるだけでこういう形に。

農林水産大臣 ちんでこうなるんですか。

林座長 はい。これはちんだけです。

マクドナルド委員 これは海外にでも輸出してもいいと思います。この間、カナダに持ってめいっこの小学校に持っていって、フランス語の学校で、教室の中でやっていたら、みんなで子どもたちが盛り上げて、あけてみるといろんなきれいな色でなっていて、とても海外でも日本のものを。

永島委員 私たちも調べたんですけれども、パテントを取るのが、何十例とあると、普通の人調べたら調べ切れない。それで弁理士に頼むと、やはりお金が30万とかかかって、もしや同じアイデアがあった場合は使えないんです。

だから、なかなか特許を取るまでの、行くまでが素人には大変な作業になって、そこであきらめてしまうところがあるのではないかと思うんです。

内閣官房長官 この牛乳は市販価格で、普通の牛乳と比べてどのくらい違うんですかね。当然、高いですか。

農村振興局長 高いです。

内閣官房長官 倍ぐらいでしょうか。

農村振興局長 倍までは行かないと思います。

丹羽委員 栄養素はどうなんですか。

林座長 栄養は変わらないと思うんです。ただ、味は全く変わるんです。やはり温めると、わかる人にはわかる変化が起きますから。

もう一つは、そういう健康な牛から出された牛乳だという安心感ができます。

永島委員 私も後で話をするんですけども、家畜にストレスがないという、人間と同じく、いろんな鶏舎の中に狭いところにいると、鶏や何かでも非常にストレスがかかって、病気に弱くなる。

この牛もそうですけれども、私は後で、鹿児島でやるあれも、飼料の中に乳酸菌や何かを入れて腸内をきれいにして、それで牛の生育が普通、今までやっていたより1か月早く生育して出荷できるようになる。それも牛のストレスがないという、人間と同じような、動物たちにとっていい環境というんですか。

マクドナルド委員 女性がいれば、安らぎがあるという。

農林水産大臣 どうなんでしょうか。逆に、余り無菌状態のものばかりを求めていると、一つの体自身が抵抗力を失ってくるという話もあります。

もう一つは、海外で生活できなくなる。日本の国内で生産したものだけしか食べられなくなってしまう。そこが怖いですね。

内閣総理大臣 花粉病がはやっているのも、余りにもきれい過ぎるからという話ですね。回虫をおなかにやっていると花粉病にかからない。

林座長 これは藤田絃一郎という医科歯科大学の寄生虫の教授ですが。

丹羽委員 何でしたか。空飛ぶ回虫でしたか。

林座長 そうです。空飛ぶ回虫です。

これは、戦前というか、戦後間もなくまで日本人の70%ぐらい回虫かぎょう虫かがいた。

内閣総理大臣 我々、しょっちゅうでしたよ。

丹羽委員 なお、藤田さんは10メートルぐらいの回虫をおなかに持っているというではないですか。それだと、絶対悪さをしない。じっとしているからと言っておられますが。

内閣総理大臣 それで、太らないんだそうですね。

林座長 栄養分をそこで彼が横取りしますから。

内閣官房長官 ダイエット回虫というのを得り出すといいかもしれない。

丹羽委員 でも、今はそんなに回虫やサナダムシはいないらしいです。

内閣総理大臣 慶応大学の医学部の教授が、今、日本では寄生虫の研究ができなくなると。発展途上国に行かないと。

永島委員 この間、ニュースでやっていましたけれども、花粉症を治すなら、韓国の研究ではキムチを食べればいいと。結局、キムチを発酵させる乳酸菌が腸内をよくして、抵抗力をつくるので、そうすると、考えてみれば日本の漬物でも十分いいわけですね。あれは乳酸菌ですから。

丹羽委員 乳酸菌だったら、ピオフェルミンか何かを飲んでいればいいではないですか。

永島委員 そうなんです。この間、東大の土着菌を研究している人が、当時ずっとお話ししたんですけども、結局、日本それぞれ固有の菌というのが、特に日本の風土というのがすごく土着菌を育てるには、こうじとかお酒や何かをつくるのにありますね。すごくいいんです。

それがやはり、人間のもともと持っている体と、生まれ育った私たちの郷土と菌というのが合っているというんです。だから、漬物なんて、もしかしたら本当にこれから考えていくと、私たちの体にとってはすごく合っているものだったのかもしれないという。

丹羽委員 漬物屋さんの株が暴騰しますね。

内閣総理大臣 私、ピオフェルミン、常備薬です。あれが一番効きます。

丹羽委員 私も毎日飲んでます。何錠お飲みですか。

内閣総理大臣 3錠です。

丹羽委員 私も3錠です。一緒です。

内閣総理大臣 書いてあるとおり。

丹羽委員 先生に聞きますと、9錠でも5錠でも一切害がないんです。

内閣総理大臣 そんなに飲みませんけれども、あれは便が調節できるから、国会なんかは特にいいんです。我慢できるから、行きたいときに行ける。それで、便秘はしない。

選挙のときと、国会ですっと席を立てはいけないというときは、前日から食後2～3錠、ピオフェルミンを飲むんです。ある程度、我慢できているんです。

丹羽委員 それでは、1日9錠ですか。

内閣総理大臣 食後ですから。3食のときで、間食のときは無用ですけども、あれはいいですね。私の体に合います。

丹羽委員 私もそうですけれども、害がないんです。あれは乳酸菌です。

永島委員 菌の研究をしている方が言っていましたけれども、その人も毎日、私もピオフェルミン飲んで、その人も毎日飲んでいて、ピオフェルミンは結局、いろんな乳酸菌のパターンが入っているそうなんです。

内閣総理大臣 普段は飲まないんです。選挙のときと、調節しなければならぬ、ここでトイレ行ってはいかぬというときでないと飲まない。

農林水産大臣 本当に、委員会の最中行かれないんですから。

内閣総理大臣 9時から12時まで、1時から5時まで、トイレ行きません。我慢しているんです。

農林水産大臣 影でそうなっているんだという話を我々、今日初めてわかりました。

内閣総理大臣 今まで、この4年間で開会中、本会議なんかでも、委員会のときはたまにおしっこは行くけれども、そうでないと、できるわけないでしょう。今年はおしっこも4時間は我慢できると。

丹羽委員 委員の方が全部飲み始めてしまって。

マクドナルド委員 国会が短くなると面白いですね。

内閣総理大臣 ピオフェルミンだけではなくしてくれるなど言っているんです。

林座長 総理、これは絶対なくなりません。

丹羽委員 これは、小泉さんがそうおっしゃったら、ピオフェルミンの株は上がります。

林座長 それはちょっとまずいかもかもしれません。愛用者が困るかもしれない。

だけれども、このまま行くとビオフェルミンの話で終わってしまいますので、今村委員はテレビ番組でいろいろやっておられますので、視聴者がどういうニーズを持っているかというのと、例えばこういう「立ち上がる農山漁村」でどういうものを新しく入れていくかという、ニーズをどう把握するかということで。

今村委員 私がやっていることは、農業の理解の入り口に立ったり、日本の価値観を少し変えるぐらいのことしかできていないんですけれども、番組で言ったら、ある面、ファンタジーが8割、リアリティーが2割ぐらいなんですけれども、少しずつそれをリアリティーの幅を増やして行って、日本の国民が農業に関心を持って、理解を持って、できたら就業するようなことが将来できたらいいなというふうに思っております。

これは愛媛県の内子町なんですけれども、ここの人たちが、まず土づくりをすごく熱心にやられていて、町独自の認証制度を取って、例えば農薬の残留土とかそういうことを抜き打ちでやっています。

自らの土地を誇りを持って、まず土づくりから始めようということで作物をつくって、それを「からりネット」というインターネットシステム、生産者と消費者を結ぶ、そういうIT技術を駆使して実績を上げて、そうすると地域の人たちは当然農業で食べたいわけで、実績が上がって、収入が上がっていくと、すごく自信を深めて、どんどん協力者が増えて行って、実績も参加する人たちも右肩上がり、これはものすごい成功事例だと思います。

地域の人自分たちの土地、自分たちの土地から出た作物に対してものすごく誇りを持っていますし、町自体がすごく活気づいています。あの売上げの推移はないと思うんです。右下、5億です。

実際、これは町の役場の人のもものすごく旗を振って、地域の人と一緒にやっているので、かなりこの辺の地域のモデルケースになって、視察も多いです。

これも、女性がかなりのパワーを持って、なおかつ実績が上がっているので、Iターン、Uターン、すごく増えています。若者が少しずつ後継者として戻ってきています。だから、農業で食えるんだぞ、プライド持てるんだぞということのものすごいいい例だと思います。

林座長 それでは、次は、三國委員はたしか愛知に行かれたんですね。

三國委員 私は、岐阜の、岐阜といってもすごい山奥で、車で3時間か4時間行きました、おばさん方がいたんです。トマトで、総理にも特別にお見せして、味見をしていただきたいんですけれども、最初は、そのおばさん方が山奥にトマトが余って仕方ないと。それをどうしようかと。最初は、トマトを捨てていたんです。それを、そのおばさんがトマトケチャップをつくり始めて、今、年間7,000万。それで、この間、私が行ったら、1億にしたいと。私をもっと驚いたのは、岐阜の超山奥で、今度、行政が手伝って彼女のショップを出しているんです。そうしたら、観光バスが10台ぐらいいるんです。そのショップが、彼女がスターになって、土地の食べもの屋さんがばっとできるわけです。そうすると、みんなそこに観光客が集まって、バスで10台ぐらい。

私は料理人なので、彼女が、三國さん、これ、味はどうですかというので、これはケチャップなんですけれども、ケチャップという名前はやめろと言ったんです。これはケチャップであってケチャップでないといいましたんですけれども、ケチャップでないと困ると言っただけでケチャップにしているんです。これを年内中に1億円企業にしたいんです。まだそんなに知られていないので、多分、これを私たちみたいなのが表に出して、地区とか、あと、全国区になって、多分1億は突破して、私が彼女に言ったのは、これを海外に売って、アジア近辺に輸出して、もっとね。

最初、お父さん方が、自分の飯もつもらないで、母さんたち一生懸命やってお金がどんどん入ってくるものだから、ごねていたんです。そうしたら、これがどんどん売れるもので、今度、晩酌にいっぱいお酒を出したんです。そうしたら、父さん方がもっとやれと言って、今、支援してくれてという。

だから、もうそろそろ7,000万か、多分、年内中には1億で、行政の人はきちっとそれをバックアップして、一緒に彼女をスターにして、観光客まで呼んでいるんです。ですから、売り上げも見ていただきたいんですけれども、これは急激に伸びるんです。

だから、先ほどおっしゃったように、私はスローフードという運動もやっているんですけれども、スローフードは個人が運動していくんですけれども、この成功例というのは行政がきちっと押さえているんです。逆に、行政が前に出て彼女ら彼らを盛り上げているという、ちょっと特殊な、イタリアとかなんかは消費者がメインなんですけれども、日本の場合、我々の成功例は行政が逆にバックアップして。

私、もう一か所行ったんですけれども、蛭を養殖していたんです。蛭は養殖できるのかとあって、奇跡的に絶対できないんです。私が行ったのは、愛知のちょっと山奥ですね。山奥ではないですか。

蛭の養殖に成功して、その蛭が今度は勝手に繁殖して、それを子どもたちに田植えとか蛭とかそういうを見せて、その子どもたちと一緒に、それも愛知の行政が引っ張って。

内閣官房副長官（政務・衆） 私は地元です。あそこは、もっと山合いに入ったところですよ。

三國委員 私は北海道出身なんですけれども、増毛とあって、ニシンが絶滅して。

内閣総理大臣 これはケチャップというか。

三國委員 総理、わかりますか。

内閣総理大臣 これだけで食べられる、トマトジャムみたいではないですか。

三國委員 総理の発言で1億突破しますよ。

内閣総理大臣 こういうのは、どこで売っているんですか。

三國委員 有名店にしか卸さないんだそうです。

内閣総理大臣 その方がいいです。最近、高級でないと買いませんから。

三國委員 結局、みそは大量生産ができないこと。大量生産しなさいと言うと、お母さんが嫌だと言って、手であおって。だから、これがもっと有名になれば多分もっと。

結局、これも売れるもので、その地域のトマトだけでは足りないわけです。そうすると、トマトをほかから買い始めるわけです。そうすると、ほかのトマトも売れ出す。

さっき、愛知の蛸の養殖も見たんですけども、やはり私は増毛というニシンが絶滅するところが、今年、ニシンが80トン捕れたんです。それはニシンを放流しているんです。今、サケも放流して、わんさか捕れているんですけども、だから、養殖というのをやはり、これから正しい養殖というのをすごくキーワードになるのではないかと思います。

内閣総理大臣 三國さんがこれを使っていると言えば、売れますよ。

三國委員 そういう意味で、私、やはりスローフードを運動している限り、ケチャップというのは変えると母さんたちに言ったんです。でも、ケチャップでないとみんなやはりわかってくれないんです。トマトソースと言うとピンと来ないけれども、ケチャップと言うとみんなここまで付いてくれると。

農林水産大臣 もっと別の話なら、もっと売れると思います。

三國委員 これは、もっと広がればもっと売れます。

それで、完璧に手づくりなんです。ただ、なべで。

丹羽委員 どのくらい高いんですか。

三國委員 お値段わかりますか。

農村振興局長 500円です。

内閣総理大臣 普通は幾らなんですか。

三國委員 普通は300円か400円です。

マクドナルド委員 まず、ボトルには入れません。容器がこんなに高級で。

三國委員 全部手で詰めて。でも、今、どんどん売れ出していますので。

ですから、私が非常に注目したのは、これは珍しいんです。行政が誘導して成功させてというのは、非常に日本だけの、やはり海外ではどうしても消費者が前に出て、スローフードもそうですけれども、成功していくんですけども、日本の場合は非常に行政が関わって成功に導いているというのがすごく印象的でした。

林座長 丹羽委員は商社の会長でおられますけれども、マーケティングということを考えた場合、どうでしょうか。

丹羽委員 私、さっきの細田さんと違って、徳島県の上勝町というのがあるんですが、これは四国で一番小さい町なんです。2,100人ぐらいしかいないんです。

総理がよく料亭に行かれたときに、刺身のところにつま物が出ますね。ちょっとお見せしてくれますか。つま物は、あそこにありますけれども、もみじとかナンテンとかササの葉です。こういうリッチなものなんです。これが商売になりまして、昔は116万円しか売れなかったのに、今は2億売れているんです。それで、全国のつま物の市場の4割をこの町がシェアを持っているんです。

内閣総理大臣 料理屋で出てくるけれども、食べませんもの。

丹羽委員 実際、本日はそれを使っているんです。

内閣総理大臣 これは食べないでしょう。

丹羽委員 勿論、食べません。

三國委員 食べられるんですか。

丹羽委員 食べられますけれども、食べません。それはいろいろ、つま物ですから。

内閣総理大臣 飾りですよ。

丹羽委員 だから、総理が料亭へ行かれて、10個お目にかかったら、4個はこの町のもので。

内閣総理大臣 何ていう町ですか。

丹羽委員 徳島県の上勝町です。これは第三セクターの株式会社いるどりというのがやっていて、町長が社長なんです。それで、1,000万円の資本金で、700万は町が出しているんです。

それで、この会員が何と180人ぐらいいるんですけれども、平均年齢67歳。要するに、行政に頼らないで自立ということ、女性を中心に目覚めたんです。だから、これは新しい農業の在り方として、しかも高齢化が進む中でこういうことができる。しかも、使っているのは防災行政無線システムという、防災のシステムを町で持っているのを使って受発注をやっているんです。だから、これは一つのビジネスモデルになります。もう一つ、島根県の、細田さんのところのさっきのヘルシー元気というお米です。これも1年半、台湾向けに、牛ふんの堆肥を使って非常においしいお米をつくって差別化をして、それで1年半で、最初は3トンです。今は30トン売れている。

値段的には、普通の台湾米が2キロで200円。これが、この米は2キロで約1,300円なんです。それで、来年は100トン売ろうと。この位の量が適正サイズのように。要するに、余り売れると供給余力がなくなってしまうのです。

内閣総理大臣 売らないんですか。

丹羽委員 はい。

内閣総理大臣 なお売れると、そうなるよ。

丹羽委員 余り売れるとなくなってしまうんです。売れなくなったときに困ってしまうから、やはり着実に伸ばしていく必要がある。

これは、私、ちょっと調べてみたら、台湾は日本と比べて、お米が主食ではないんです。日本のお米は、日本の食べ方をしなければいけない。要するに、べとついた、今、お食べいただいたお米ですね。スーパーでそういう食べ方を教えるんです。金持ちな人ほど買うんです。それで十分売れていく。

今、日本は農産物の輸出と言われてはいますが、この4～5年で余り増えていないんです。増えているのは圧倒的に中国向けなんです。

中身は何かというと、ほとんど水産物です。だけれども、農産物で増えているのは何とリンゴなんです。リンゴは台湾向けにものすごい勢いで増えているんです。

それで、さっきおっしゃった納豆。これも日本ブランドで売ります。それから、果物

の柿です。あとはブドウとかメロンとかワサビ漬けとか、こういう日本独特のものが売れるのです。日本でも昔、総理とか我々の小さいころ、アメリカのハーシーのチョコレートとかチューインガムとか、アメリカ品であれば高級だと思って高いお金を出しましたね。それと同じことが、台湾、中国で、今、起きているのです。

内閣総理大臣 日本ブランドがいいんですね。

丹羽委員 日本ブランドです。

だから、その日本ブランドを台にして、日本のワサビ漬けとか、日本の青森のリンゴとか、そういうものが猛烈な勢いで伸びているんです。

現在、日本の農産物の輸出は2,800億ぐらいあるんです。それで、継続して伸びているのは、例えば台湾はリンゴ、あるいは中国が伸びているのはしょうゆとかホタテ、タコ、サンマなんです。しょうゆが伸びているんです。日本のしょうゆはおいしい。

それから、香港で伸びているのはたばことアルコールなんです。着実に伸びています。韓国は、ブドウとサケマス等の水産物です。

タイに行っているのは、カツオ、マグロ、緑茶が伸びているんです。日本のチョコレート、緑茶というものがタイでは伸びているんです。

私、日曜日からタイのタクシンさんのところに行ってきますけれども、そういうものが、特に緑茶がものすごい勢いで、今、ボトルのグリーンティーが伸びているんです。

したがって、日本の農産物の輸出で着実に伸びているのは、今、申し上げたようなもので、水産物が中心ですけれども、やはりリンゴとか、台湾のお米とか、あるいはブドウとか柿とか、日本独特のものの輸出余地があるという場合は高くてもいいけれども、こういうものをこれから島根県と同じようなことをやはり各地で広げていくということが大事だと思います。

農林水産大臣 今、日本の農産物輸出、約三千億なんです、5年で倍増にせよと。今、総理の御下命があって取り組んでいるところですが、いろいろと勉強しております。

丹羽委員 2,800億ですから、恐らく3,000億で、倍増するためには、今、申し上げた着実に伸びているものですね。

内閣総理大臣 これは、今、オランダで2兆円ですか。

林座長 はい。2兆円です。

内閣総理大臣 日本は、わずか3,000億円なんです。努力が足りない。

丹羽委員 それは、やはりそれだけの努力をまだしていないから。

それで、やはり日本ブランドを使うということですね。

農林水産大臣 本会議がございますので。

ありがとうございました。

林座長 ありがとうございました。

(農林水産大臣退室)

林座長 確かに、オランダなんかは2兆円という兆円の単位なんです、畜産製品がや

はり価格が高いものですから、それで兆の単位に行くんですが、今、丹羽委員がおっしゃったように、日本でもリンゴなんかは台湾で結構高く売っていますね。だから、その意味では、高く売れるものというものは。

内閣総理大臣 青森産リンゴは、中国で2,000円ですから。信じられないです。

丹羽委員 でも、やはり買うんです。我々の小さいころのアメリカ品と一緒に。

内閣総理大臣 モモだってナシだってイチゴだって売られているでしょう。

林座長 丹羽委員がここまで、島根の土地の方に行かれたからですね。

丹羽委員 いえ、まだ行っていません。行かなくても、勉強して。

林座長 行かなくても、ここまで。行かれたら、もっとあれになってしまいますね。

内閣総理大臣 これはどこですか。

林座長 これは島根です。

内閣総理大臣 それでは、みんな島根で食べているんですか。

農村振興局長 台湾です。

丹羽委員 台湾でああいう試食会をやっているんです。これが2倍以上の値段で売れているんです。

内閣総理大臣 今、中国で炊き方がわからないというので、炊飯器とセットで売ります。考えましたね。炊飯器だったら、だれもわからなくてもおいしく炊けるでしょう。

だから、いい米と炊飯器とセットで売り込むというのは。

丹羽委員 それをやったらいいかもわかりませんね。

内閣総理大臣 炊き方によって、まずい、下手になってしまいますから。

内閣官房副長官（政務・参） それから、竹炭があるでしょう。あれを次に付けるらしいです。すると、香りと光沢です。

内閣総理大臣 竹炭って何ですか。

内閣官房副長官（政務・参） お米を炊くときに竹の炭で。

永島委員 竹を炭化したものです。木炭ではなくて、竹で炭をつくっているんです。

内閣総理大臣 そんなのがあるんですか。それでうまくなるんですか。

永島委員 一緒に炊き込むと、においや何かを活性炭で取ったりして。

マクドナルド委員 米がきらきらするんです。

内閣官房副長官（政務・参） 光沢ができるんです。

内閣総理大臣 焼き鳥の備長炭のにせが多いというけれども。

林座長 竹炭は、日本で幾らでもできますので。

内閣総理大臣 竹はたくさんあるし、竹炭で焼いたらどうなるのでしょうか。

林座長 竹炭はすぐ燃えてしまいますので、ちょっと長持ちしないです。長持ちするのはやはり。

永島委員 備長炭で、白い方がもちます。

内閣官房副長官（政務・参） それと、やはり健康とかヘルシーという言葉は必ず付け

たら、少々高くても世界各国買うんです。日本でも、だれでも買うでしょう。あれはヘルシーだからいい、それでは、買ってしまおうと。

林座長 永島委員、鹿児島に行かれたんですね。

永島委員 そうです。鹿児島の柳谷地区という、ここは小さな村なんですけれども、地区なんです。それで、行政に頼らずに豊重さんという方が10年間、自治公民館長は1年で終わるんですけれども、その方がリーダーになって、自治公民館長としてずっと続けていたんです。

それで、特色のあるものを、牧畜をやっていまして、そして、食事が終わった後でよかったんですけれども、牛ふんがいっぱい出るので、それをどのように処理しようかと思ったときに、土着菌、もともとそこにある土着菌を牛ふんと混ぜて、そして、そこに米ぬか、サトウキビかすを入れて、土着菌が好気性の菌ですから、かき回さなければいけないんです。それを、高齢の方たちなんですけれども、皆さんで始めたんです。そうしたら、このような有機肥料になりまして、これがまた売れていくんです。

それで、全然行政に頼らず、自分たちで建物や何かを、公民館を建てるのも自力でお金を上げて、サツマイモ、カライモを植えて、この肥料で育てる。その植えるのを地元の高校生たちが頑張っけて植えて、高齢者と高校生の活動で、全然行政に頼らず、自分たちで資金をつくって、新しい産業を。

内閣総理大臣 今、上に出ているのがそうですか。

永島委員 そうです。新しい産業を興して、そして、焼酎をつくって、あと、こちらに、これは。

内閣総理大臣 ナガイモですか。

永島委員 ナガイモと思われましてけれども。

内閣総理大臣 ゴボウですか。

永島委員 ジネンジョなんです。ジネンジョというのは、大体、この太さぐらいなんです。それで何年もかかるんですけれども、この菌でジネンジョを栽培したら、1年ちょっとで、これは短い方なんです。私がもらったのは、もっと長い。1年ぐらいで、これが成長するという。

それで、いろいろな肥料でやっていくとすごく、先ほど東大の菌の研究の方にやってもらって、とても日本という気候風土の中では、やはり土着菌というのはすごく作物に合っていて、何で合うかという、栄養があるのかなと思ったら違うんです。菌と作物が争うんです。その中でやはり勝ち残っていくという形で育っていく。そして、シイタケや何か、なぜ、本当はすごく安定した土壌の中なら、土の中にいる菌で終わるんです。

でも、なぜそれがシイタケというような形になって出てくるかという、土着菌の中で争って、子孫を繁栄しようと思ってシイタケになって、胞子を飛ばそうと思うから出るそうなんです。そういう意味では、ミネラル分や何か当然、土の中にあるけれども、菌と争って作物が育つという、すごく日本の農業というものはものすごく気候風土というもの

が大きく左右している。

そして、先ほど、この飼料を、今度は牛の飼料の中に入れて育てたら、今までより1か月、総理と同じく、腸が元気になって、1か月早く出荷できる牛が育つようになったそうなんです。それも牛にストレスがかからずに腸内で育つという。

本当に小さな地区なんですけれども、今、全国から視察にいらして頑張っているという、非常にユニークな地区でした。

もう一つ、私は、先ほど活動報告で紹介された「青空市場」というんですけれども、東京のど真ん中で、銀座で市場を、生産者と消費者が出会える市場というのを去年から実験的に始めたんです。

なぜかというと、ニューヨーク、ロンドン、パリ。パリなんかはマルシェがあって、生産者と消費者が集う場というのがあるんです。東京には築地がありますけれども、集う場がないんです。私は十何年間、農家の人たちにいろんなことを教えてもらって、農業の問題、未来、悩みや何かというようなことを直接お話を聞いて、そういう場合に、例えば消費者が疑問に思っていることを生産者と直接話すなんていうものができたら、それがすごく食に対する食育や何か広がっていくのではないかなと思うんです。

もう一つ、私たちがニューヨークに行って、5番街に行って買い物するのはちょっと気おくれますけれども、例えばニューヨークのマーケットでリンゴを1個買ったなら、何となくニューヨーカーになった気分になれるというか、そういう意味では外国の方がいらして、日本というものの一番の、総理がおっしゃっているビジットジャパンの、例えば入り口としては、市場が入って、そこからビジットジャパンというのは多分、私が思うには一番の観光資源というのは日本の自然、農林水産業というところになっていくと思うんです。そこに対しての入り口という形では、マーケットというものが外国の方がいらして、そして、そこからいろんなところに広がっていくという形ができたかと思っているんです。

今、ちょうどニセコなんて雪がいいというので、オーストラリアの方が、今、ニセコにどんどん行かれて、千歳と直行便もできたというので、そういう意味では、これから日本の農林水産業というのはすごく観光資源になっていくのではないかなと思っております。

内閣総理大臣 北海道のナガイモは台湾で売れて、鹿児島の方が台湾に近いのに、ジネンジョは同じですから。

三國委員 総理が味見したいそうですから。

内閣総理大臣 今、昼間だから。私は芋焼酎好きだから。

鹿児島は芋がないんですよ。

永島委員 そうなんです。今、芋焼酎がすごく売れて。

内閣総理大臣 芋が足りなくてしょうがないんですよ。

林座長 今、外国にどんどん流れています。まだ本数としてはこれからというところですが、急激に伸びています。

内閣総理大臣 ちょっと前までは、芋焼酎はにおいがあるから嫌だという若い人が多か

ったんです。最近、甲焼酎よりもおいがよいということで、芋焼酎の方が売れているんです。

永島委員 それはまだ実験的につくっていて、市販されるまでには本数が出ないんですけども、これから頑張って、だから、さっきの土着菌にあった作物や何かをこれから選んでつくっていきましょうという。

林座長 本当に、どうもありがとうございました。貴重な御意見をいただきました。これを生かしながら、今後ともこの「立ち上がる農山漁村」のプログラムを続けてまいりたいと思いますが、総理、是非、もう一つ、これからのお願いといたしましては、御視察に行かれたときにちょっとお立ち寄りいただけたら大変ありがたいんですが、今は30ですけども、毎年30増えていきますので、これから視察される時は必ずどこかで、行かれたすぐ近くにこういう表彰をされたところがあるというふうになりますので。

内閣総理大臣 農業は大事で、私はこの間、刑務所に視察に行ったんですけども、農作業はないんです。囚人が、いろんな技術とか訓練をやっているんですけども、農作業も加えたらどうかと。全国に今、広げようとしている。就労でも、囚人が前歴を問われると企業は雇いにくいでしょう。けれども、農業だったら、特別な技術でもある程度訓練を受ければ集団でできるでしょう。農業だって、分業はできる。だから、農業を今後の囚人の活動と同時に就労活動にも入れる。

これから、休耕田が多いというから、各地に休耕田をほうっておくとますます荒地になってしまうから、これを生かしながらそういうものを考えたらどうかと。

丹羽委員 成長しますから。

内閣総理大臣 喜びでしょう。情操教育になるでしょう。作物をつくって、朝育ているかどうか心配で、どんどん成長していくのが楽しみですね。これを全国に広げていきましょう。

いろんなふうに、これからの農業の分野というのは発展できるのではないかと、ただ、守るだけではだめだと。輸入を阻止するばかりではだめだと。みんな輸出できるんですから。それを攻めの農業という言葉で、輸入を阻止するというところから、日本の農産物も輸出できるという攻めの農業に転じるということでやって、皆様方も是非ともいい品物を、安いものでは競争できない。たとえ、発展途上国で安い農産物で競争したって勝ってありませんよ。高いけれどもおいしいということで競争しないと。

焼酎なんて、かつては、あのサッチャーのときに、ウイスキーと比べて同じ蒸留酒でありながら、日本の焼酎の税率は低過ぎると。あれを言われたとき、これがウイスキー並みに上げられたら、日本の焼酎業界は全滅すると。壊滅的状况を受けるというので、やめたんです。今は何も、日本酒は売れないけれども、焼酎は売れてしまっている。だから、やり方です。

困難なときこそ、新しい発展の可能性が眠っているんです。青森のリンゴだってそうです。日本で売れなくなる、赤字だ、このままでは倒産してしまうということで、イギリス

に出して、中国に出して、今、青森のリンゴ、よくなってしまったんですから。

三國委員 私の友達は、青森のリンゴをパリのベルサイユに持っていったんです。それで、この間イベントをやっていました。パリジェンヌがこぞって買うんです。リンゴを持ってベルサイユに行くんですよ。

内閣総理大臣 日本のを食べさせるとおいしいですから。

今のケチャップもおいしかったです。

林座長 それでは、来年、またこのような、今度は新しい30を付け加えた形で会議を行いますので、総理、是非ともまた御出席いただければ。

内閣総理大臣 映画だって、食生活が大事だということをやらないと。

永島委員 そうですね。

林座長 そういう感じで出演いただいて。

どうもありがとうございました。